

熱と弾力があるなら

牧師 山本 護



昨年末、からっ風吹く寒い日に、八ヶ岳伝道所では大掃除と餅つきをしました。なかなか思いきれずに実現しなかった餅つきを後押ししてくれたのは、その春のこと、リニア計画でダメになるIさんの田圃がきっかけでした。「じゃあ教会で餅つきするから、抗議の表明としてモチゴメ植えて下さいな」と、つい口走ってしまいました。

餅つきというと、搗いている威勢のいいところが注目されますが、準備や始末にこそ相当な手間と時間がかかります。私など、おもしろがって搗くか、駄句をひねって遊んでいるがごとくですが、女性たちは搗きたての餅をのし台の上で手際よく丸め、箱に納めていきます。「餅まるめ納めて凹と凸残し」。力いっぱい搗くことも、せつせと丸めていくことも祈りの身体のような気がして、ううむ良いなあ、ぼんやり感慨に耽りました。そして、それぞれの祈りの痕跡が残る、まことにおいしい餅ができました。

パンや葡萄酒がない東南アジアの辺境の教会では、餅とドブロクで聖餐式をするそうです。聖晚餐を日常食でおこなうとは、イエスの作法に倣っていても、それなりに正統なことでしょう。触発されて私も昔、餅と清酒で聖餐式をしたことがあります。紋付き袴を礼装にするようでわざとらしく、恥ずかしくなってやめてしまいました。

「体は一つ、霊は一つ(エフェソ 4:4)、主は一人、信仰は一つ、洗礼は一つ(4:5)」。とはいえ、実際にはなんと多様な現れ方をするのでしょうか。聖霊降臨の折に人々は驚いて言います。「どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか(使徒 2:8)」。ガリラヤの漁師(2:7)が数多の外国語(2:9~11)を喋ったというより、言語や文化を異にする者たちが、馴染んだ、心の深いところに響く「故郷の言葉」で聞いたのです。語る者と聞く者の境がない存在の深部において、霊や信仰が「一つ」なのであり、認知しうる表層はむしろ違っている方が自然ではないでしょうか。

「餅まるめ納めて凹と凸残し」。一人ひとりが己の形を為し、しかもそれらが無理なく一つに納まっていること。私たちが熱と弾力のある搗きたて餅であるなら、キリストの一つなる体に自ずと納まりながら、私という凸凹がそのまま尊ばれることになるでしょう。Ω